

チャーチスト運動の歴史像

——特にランカンチャーを中心として——

村岡健次

【要約】 「チャーチスト運動とは何か」という問に対し、従来の教科書的な規定に従つて、これを単に「人民憲章を要求した労働者階級の運動」と解したのでは、もとより十分ではない。この運動が単なる労働者階級の政治運動ではなく、本質的に社会経済的な運動であつたことは、イギリスの十九世紀前半という時期が産業革命の激動期であつたという事を想起するだけで、もはや明白であらう。

この通俗的・教科書的見解から一歩進んだ、そして恐らく現在広く一般に受容られている見解は、レーニンのそれである。すなわち、チャーチスト運動は「最初の広範な、本当に大衆的な、政治的に形態を整えたプロレタリア的革命運動」という規定である。しかし一たびチャーチスト運動の具体的なプロセスの中に踏込んでみれば、レーニンのこのカテゴリー的な規定も、正しいチャーチズム像を把えていないことが判るのである。このように見てくる時、我々は、「チャーチスト運動の歴史像」は現在なお定着されていない、と結論せざるをえないのである。本論文は、かかる見地から、特に産業革命の中心的地域であつたランカンチャーに焦点をしばつて、具体的な「チャーチスト運動の歴史像」を描かんとする一つの試みである。

一 序

チャーチスト運動の名を聞く時、人は、「人民憲章 Peple's Charter を要求した労働者の政治運動」という教科書的な規定を想起するに違いない。この規定は、い

ればチャーチスト運動の古典的見解である。^① この規定は、それを、すでに産業革命を経験したイギリス社会という時代的背景の中に置いてみても、チャーチスト運動のほんの一面面を把えたものでしかありえないだろう。なぜならチャーチスト運動は、コールのいう如く単なる政治運動では

なく、「純粋に政治的綱領を持った、本質的に経済的な」労働者の運動だったからである。しかしながら、この古典的見解の評価について一言することは、問題を提起する上にきわめて有意義であるように思われる。

ここで従来の研究史を回顧すれば、二〇世紀初頭に至るチャーチズム研究は、チャーチスト運動のトレーガーのうちでも、特にその上層部に位する教養高き熟練職人の運動に最大のスペースを割当ててきたのである。しかもその研究は、上級職人層への社会経済史的なアプローチではなく、むしろ彼等が結成したロンドン労働者協会 London Working Men's Association — L・W・M・A と略す——の動向を追求するという政治的関心に支えられたものであった。L・W・M・A とは、ロンドンの熟練職人を中心に結成されたチャーチスト運動の一勢力であるが、しかし L・W・M・A が重視されたのは、またそれなりの理由があつたのである。その理由の第一は、先に寸言した如く古典的研究に見られる旺盛な政治史的関心である。周知のように政治運動としてのチャーチズムは、労働者によるかの選挙法改正運動 (一八三三年) の二番煎であつた。そ

して政治運動としてのチャーチズム (すなわち人民憲章獲得の運動) のトレーガーこそ、この L・W・M・A に他ならなかつたのである。人民憲章の起草者は、L・W・M・A の領袖ウイリアム・ラベットであつた。更に、彼のもとに結集した熟練職人は、すでに一八三二年の運動においても全国労働階級同盟として運動の最左翼を担っており、またチャーチスト運動においても、終始一貫、人民憲章の要求に忠実であつたのである。かくて往時のチャーチズム史家は、かかる見地から議会改革運動としてのチャーチズムに最大の比重をかけたのである。第二の理由は、L・W・M・A が運動の発生を含む初期の段階で運動の指導的地位に立っていた、という事実である。その詳細については今は立ち入る余裕はないが、いづれにせよ L・W・M・A は、一八三九年のチャーチスト第一次請願まで、パーミンガムのブルジョア急進主義勢力と共に、いわゆる道徳派として運動の指導権を掌握していたのである。第三の理由としては、ラベットに代表される L・W・M・A の態度が、チャーチズム史家の嗜好にかなつたことが挙げられる。チャーチスト運動を支えた労働者勢力は、大きくラベットに代表

される上級職人とF・オコンナーに代表される北部労働者勢力に分けられる。上級職人を代表するL・W・M・Aの会員達は、高い教養を身につけた労働者階級のエリートであり、領袖ラベットは、高邁な理想と厳正な人格の持主であった。一方のオコンナーは、コールに言わせれば「群衆演説家であり、大体において間の抜けた思想の持主」であった。かくて古典史家達は、オコンナーを軽蔑してラベットを偶像化する傾向があつたのである。

以上、日本人の常識と化しているチャーチスト運動の古典的見解がよつて立つ基盤を摘出したわけであるが、ここで我々はかのコールの言葉を今一度想い出す必要がある。繰り返していえば、チャーチスト運動は「純粹に政治的綱領を持った、本質的に経済的な」(傍点は筆者)労働者階級の運動だったのである。チャーチズムの古典的研究は、その中心を上級職人層に置いてきていた。しかし、なぜ第一次請願後に、L・W・M・Aは、運動の指導権をオコンナー傘下の北部労働者勢力に譲り渡さねばならなかつたか、という問題を提起すれば、直ちに我々は、その研究対象が上層部の熟練職人から、しかも社会的には弱小勢力である

彼等から、運動のランク・アンド・ファイルを含む一般労働大衆に拡大されねばならないことを知るのである。そして事実二〇世紀のチャーチズム研究は、この方向に向つて踏み出されたのである。かくして我々には、より一歩つこんだ、より正確なチャーチスト運動の規定が与えられることとなつたのであるが、しかしかかる規定で人口に膾炙しているものは、これをレーニンの次の言葉で代表できるのが現状のようである。すなわち、チャーチスト運動は、「最初の広範な、本当に大衆的な、政治的に形態を整えたプロレタリア的革命運動……」^④というのがそれである。さてこの規定であるが、それがマルクスの階級闘争史観に立脚したものであることは明瞭である。しかしそうだとしても、一步チャーチズム研究の森に踏みこんでみれば、チャーチスト運動は、レーニンのこの規定をもつてするに、あまりにも複雑多岐であることがわかるのである。勿論この時代にブルジョアジー対プロレタリアートの階級対立がなかつた、というのではない。それどころかこの階級対立は、一八三〇年代から四〇年代初期(すなわちチャーチスト運動の高潮時)には、特に穀物法の問題をめぐつて顕著な形をと

って現われてさえているのである。が、筆者がここでいいたいのはチャーチスト運動に関する限り、単にそれだけの規定では、問題の解決にはならない、ということなのである。

上にチャーチスト運動の複雑多岐な性格を指摘したが、運動の多様性は、具体的には、次の二点で現われてくる。

第一は、地域による運動の多様性である。例えば、運動の三つの指導的地域たるロンドン、バーミンガム、マンチェスターを試みにとりあげてみても、同じチャーチスト運動でありながら、それらは互に著るしい相違を示しているからである。^④ かかる相違の生れ来たる原因は、それが当該地

域の歴史的地域性に負うているのは当然であるが、主として、産業革命の進展という社会変革が生み出した地域的社會構造の相違に求められるのである。A・ブリッグズが適切に指摘している如く、チャーチズムは雪だるまの運動である。^⑤ それは、地域的な諸々の不満を一堂に会して、それに全国的規模の運動として一つの共通の表現を与えようとしたものである。さすればチャーチズムの地域による多様性こそチャーチズムの分析的研究の第一歩たるべきなのである。しかるにチャーチズムが、単に労働運動史の一環とし

てでなく、いわゆる歴史学の問題として提起されるに至ったのは、実はつい最近のことに属する。^⑥ 研究はなお蓄積的段階にあり、それゆえこの興味深い問題も、今は単に問題点の指摘にとどめておこうと思う。

チャーチスト運動に多様性を与える第二のものは、労働者階級の構成の問題である。レーニンの規定が不十分、ないし誤解をうけやすいのは、労働者階級内の異なる社会層を無視して、これを「プロレタリア」として一括してしまつた点にある。チャーチスト時代の経済学者ソーントンはこう述べている。

労働人口は、それがただ一つの階級を構成しているかの如くいわれているが、実はこれは幾つかに分かれている。そしてそれらの間で報酬の割合は単一のものではない。……だから労働人口の状態を完全な誠意をもつて現わそうとするなら、各階層をそれぞれ別個に記述する必要がある。^⑦

と。更にいえば、労働者階級は、互に異なる利害と異なる意識を有する幾つかの社会層を包含していたのである。それらはチャーチスト運動との関連から見れば、上から順に次の三つのものである。

(1) 上級職人 Upper Craftsmen

(2) 労働組合員 Trade Unionists — 工場労働者は一応
この中に含める。

(3) 家内労働者 Domestic Outworkers

上級職人の勢力を代表したL・W・M・Aについてはすでに述べた。彼等は産業革命の影響を直接蒙らなかつた植字工、大工、家具師、印刷工等からなつており、自から一つの社会的勢力たるためにはあまりにも弱体であつた。だから、チャーチスト運動の去就を決定したものは、自からの中に爆発的エネルギーを包蔵する労働組合員以下の労働大衆の動き、ないしこの労働者層をいかに把握するか、というところにかかつていたのである。この問題こそチャーチスト運動の成否を左右した問題であると同時に、この問題が本稿の出発点となるのである。

上述したことから明らか如く、チャーチスト運動はその古典的規定によつても、またレーニンのカテゴリーリッシュな規定によつても、なお十分把握されえないのである。かかる意味で具体的なチャーチスト運動の歴史像は、なお与えられていないのが現在の状態である。本稿はチャーチ

スト運動を、単なる政治運動としてではなく、これを社会的な運動として把握、運動のエネルギー主体を追求することによつてチャーチスト運動の具体的な歴史像を描かんとする一つの試みである。それゆえ、研究の方向は、労働組合員以下の労働大衆に向けられるわけだが、そうすれば我々は、嫌でもチャーチスト運動に「その要員と激烈性を与えた」^④木綿工業地帯を見ないわけにはゆかないのである。本稿の具体的な目的は、チャーチスト運動の構造を産業革命の中心地たるランカンシャーに探ることにある。

二 ランカシャーにおけるチャーチスト運動

1 景気変動と労働者階級の構成

産業革命発祥の地ともいうべきランカンシャーについては、今更多くを語る必要はあるまい。工場制度と厳密な意味での労働者階級の大量な存在こそ、まさにチャーチスト時代におけるランカンシャーの地域的特色に他ならなかつた。それゆえこの地域では、ロンドンやバーミンガムと異り、そこにはもはや古い穏かな階級構成はなく、いわゆる「二つの国民」、すなわちcotton masters と cotton operatives

の二つの階級への尖鋭な社会分裂が進展していた。だからランカシャーにおける労働運動は、チャーチズムに限らず、全てその根底には、この二者の利害の対立が秘められていたのである。しかし、およそ二つの階級は、全ての問題において、また常に対立抗争するものではない。時によっては、またその問題によっては、握手することもあるのである。

対立するか和解するか、それはその時々、歴史的諸条件と、それぞれの階級に固有な諸事情の組合せにかかっている。そして一八三〇年代中葉から約二〇年間にわたるチャーチスト運動は、ここランカシャーにおいても、両階級の対立と和解の複雑な組合せの歴史を描き出しているのである。とはいえこの対立と和解の複雑な組合せは、必ずしもアトランダムなものではない。ここでは行論の便宜上、この複雑性を整理する鍵のうち、ただ二つのものを提示するに止めておきたい。一つは景気の変動であり、他はランカシャーにおける労働者階級の構成の問題で、後者は本論の主題に直接係るものである。特に景気の変動については、これこそ前記の対立と和解の複雑性に、大まかな規則性を与える最大の要件に他ならない。資本主義体制が一

応でき上ったここランカシャーにおいては、景気変動はチャーチスト運動の盛衰と密接な関係を有している。それゆえ、どうしてもこの時期の経済恐慌について、前もって一言する必要がある。

不況は一八三六年に始り、一八三七年恐慌を経て、一八四二年恐慌で遂に最悪の状態に達する。しかしそれ以後巨視的に見れば、景気は上昇カーブを描き、一八四七年恐慌で若干後退するものの、以後、チャーチズムが完全に消滅する五〇年代中葉までは、一路上昇線を辿っている。そして、チャーチスト運動の激化と衰退は、全くこの景気の変動と期を一にしているのである。請願は、一八三九年七月、四二年五月、四八年四月の都合三回行なわれているが、これは経済の政治への反映のずれを考えれば、常に景気の後退と一致しているといっている。一八三七年には、輸出、特に対米輸出が激減し、なかならず全生産額の三分の二を海外市場に依存する繊維産業部門は多大の影響を蒙った。労賃は切り下げられ、マンチェスターだけでも五万の失業者を出したのである。そしてこの恐慌は四二年に底をつき、かつてない深刻さで労働者階級を把えるのである。窮民の

数はイギリス全体で一二〇万を数え、マンチェスター、ストックポートの失業率は、それぞれ33%、50%^①に、ボルトンの工場労働者失業率は実に60%に達したのである。一八三七年から四二年に至るチャーチスト運動の高揚も、恐慌でその糧を奪われた労働大衆なしにはありえなかつたに相違ない。また、一八四八年の請願が何の効果も發揮しえなかつたのは、四七年恐慌がイギリスにおいては、鉄道建設等の経済発展に支えられて、容易に克服せられたことと無関係ではなかつたのである。かくの如く、景気変動はチャーチスト運動の発条であつた。チャーチスト運動のエネルギーの大きさは、このバネの伸縮を変数とした函数値、といふことができるであらう。

第二は、ランカシャーの労働者階級の構成の問題である。チャーチズム史家D・リードは、それを次のように述べている。

一八四〇年にランカシャーには、恐らく二十五万の木綿工業の工場労働者と十万の手織工が存在していた。そして他の多くの産業人口が、直接にその生計を木綿工業に依存していた。特に機械製造、建築、採炭、運輸に従事する労働人口はそうであつた。一

八三五年にはランカシャーの男子人口のうち、三分の二から四分の三が程度の差こそあれ木綿生産とその取引きに従事していた、と推定される。^②

このリードの言葉にも窺われるように、ランカシャー労働者階級の中核は周知の cotton operatives で、更に彼等は、大きく二つの異質な社会層、すなわちすでに述べた労働組合員と家内労働者から構成されていたのである。前者の中心的勢力は工場労働者たる綿紡績工組合、後者は手織工である。勿論ランカシャーに熟練職工の上級職人勢力がなかつたのではない。ちなみにこの地域でのチャーチスト運動は、先ずマンチェスター政治同盟 Manchester Political Union——M・P・Uと略す——の指導下に進められたが、この機関は、ブルジョア急進主義者と熟練職人の連合勢力の代表に他ならなかつた。しかしながらM・P・Uの代議員は、カーサル・ムーア（マンチェスター）の大集会を成功させたものの、第一次請願前に早くも彼等より下の労働者の代表によつてとつて代られ、以後この地域の運動において、何の役割も演じずることはなかつたのである。^③ またランカシャーには幾つかの熟練職種労働組合

が存在していた。これらの労働組合員の中には、個人的にM・P・Uに参加したり、集会に出席したのもあったが、しかし労働組合自体は、チャーチズムには何等の関心も示さなかつたのである。^⑧すなわち上級職人層は、ランカシャーにおけるチャーチスト運動の実質的担い手でなかつたばかりか、この地域における運動の特質に何等貢献するところはなかつたのである。

さて以上チャーチスト運動との関係から、二つの異質な社会層として、綿紡績工組合を中心とする労働組合員(工場労働者)と家内労働者たる手織工を抽出したわけであるが、チャーチスト運動の性格を明確ならしめるためには、更に進んで、この二つの社会層相互の関係について考察することが必要である。

この二つの社会層は、重要な点で互に共通な性質を有した。それは両者が共に、すでに生産手段から分離され、労働力以外に売るべきものを持たない賃金労働者であつた、ということである。かかる意味でこの両者の間には、資本家対労働者の間に見られる根本的な対立の契機はなかつたのである。否むしろ逆に、労資の利害の対立が極点にまで

押し進められた時には、一時的に両者は手を握り合つてその共通の敵に対したのであり、かつかかる事態は、チャーチスト運動の中にも往々にして見られたのである。しかしながら他方、この両者の間には越えがたい深い溝があつたのである。そしてチャーチスト運動の趨勢を左右したのは、両者に共通の性格ではなく、むしろ両者の相違点であつた。よくいわれるチャーチスト戦線の内部分裂の問題は、この両社会層の相違性に深く根ざしているのである。

経済史家ホブスボウムは、労働貴族を規定する基準として次の六点を考慮している。すなわち、(一)労働者の収入の高とその規則性、(二)どのような社会的保障が期待できるか、(三)彼の仕事の諸条件——この中には、彼がその上司と親方からどう待遇されるか、という問題を含む。(四)彼より上および下の社会層との関係、(五)彼の生活の一般的条件、(六)彼と彼の子供達の将来の出世について何が期待できるか、の六点である。^⑨この労働貴族に関する六つの基準は、ここで問題の二つの社会層を区別する場合にも、十分有効であるように思われる。なぜなら綿紡績工と手織工では、この六点のどれについても、非常な落差を指摘することができ

るからである。今この六点の全てについて、両者を比較検討する余裕はないが、例えば収入については、綿紡績工のそれが、週二〜三シリングで、かつその支払いの規則性が比較的維持せられたのに反し、手織工のそれは、週僅か五〜六シリングで、その規則性はほとんど零に近いのである。^⑩ また綿紡績工は、彼等が労働組合組織を有したがゆえに、失業救済、組合基金による生活保障等に与りえた他、賃金値上げ、労働時間短縮のための積極的働きかけが可能であったのに対し、組織を持たぬ手織工には、かかる恩典は何一つなかったのである。その他労働時間（労働組合では、すでに十時間労働運動が強力に推進されていたのに反し、手織工は、なお十四ないし十八時間労働に呻吟していた）、労働諸条件（工場に対する地下室、手織工の賃金はなお出来高払いであったこと等）、生活条件一般にわたり、両者の間には大きな懸隔があったのである。

しかし両者の相違は単にこれに止らない。上に述べた幾つかの相違の根底にある歴史的な、それゆえに本質的な相違点は、綿紡績工が明日の歴史的使命を約束された工場制度の担い手であったのに対して、手織工が工場制以前の家

内工業体制に属していた、ということである。しかしこれについては行論に譲るとして、ここではチャーチスト運動の具体的なプロセスの中で、両者の融合を不可能にした両者の意識の隔りに触れておきたい。両者の意識に確然たる溝を置いた第一のものは、いわゆる Trade Unionism の基盤にあつた意識、つまり熟練を尊重する意識である。

「職人の労働者についての堅い信念は、労働者は劣った階級であり、彼等は区別されねばならぬし、またつけ上らぬようにしておかねばならぬ、というものであつた」という T・ライトの言葉は、そのまま綿紡績工と未熟練の手織工の間にもあてはまるのである。綿紡績工組合の一書記は、「わが職工は、継糸工その他未熟練労働者一般とは、そのより高い能力において区別される」と堅く信じていた。彼は次の如く断言して憚らなかつた。「雇傭者は、かつてみごとに選択を行つてきた。そして現在においても、彼等は働く能力において強者を選択している」と。^⑪ 両者の意識を分つ第二のものは、イギリス人のアイルランド人蔑視の意識である。手織工の大群は、後に述べるようにその多くをアイルランド人に負うていた。加うるに当時あつては、

イングランド、アイルランド両労働者群は激しく対立し合っていた。というのは、アイルランド移民の洪水が恐慌下の狭隘な労働市場で、イングランド労働者と激烈な競争を展開していたからである。アイルランド人は、その持つて生れた天性と旺盛な生活力のゆえに、どれ程劣悪な労働条件をも厭わなかったから、狭い労働市場は一層せばめられ、イングランド労働者の地位はますます低下せざるをえなかったのである。

以上述べた如く、綿紡績工と手織工は二つの異質な社会層であった。チャーチスト運動において、彼等はプロレタリアートという共通の利害と意識においてよりは、むしろ両社会層に固有の利害と意識において動いたのである。かくてチャーチスト運動には、複雑な諸局面が生れることとなった。

2 労働組合とチャーチスト運動

この問題については、綿紡績工組合とチャーチズムの関係をも含めて、すでに古賀秀男氏の秀れた研究があり、それゆえ詳細は割愛して、ただランカシャーの場合に限ってこの問題を整理しておこうと思う。

一八三四年のR・オーエンによる労働組合大連合の崩壊以後、総じて労働組合は自らの立場をトレード・ユニオンズに固定しつづつあったこと、またチャーチスト運動において労働組合がそれ程に積極的でなかったことは、チャーチズム史家の間でほとんど意見の一致を見るところである。しかしランカシャーの場合、労働組合はチャーチズムとは全く無関係であった、と断ずることはできない。例えは運動初期における一八三八年九月二十五日のマンチェスター、カーサル・ムーアの大集会には、紡績工を含む三千五百の労働組合員が出席していたし、またマンチェスター・アドバタイザー紙も、この集会について次の如く報じているからである。

それは、すぐれてランカシャーにおける職業組合、勤勉なる職人、労働者の集会であった。……彼等は、かの政治的变化の効果（『人民憲章を獲得することの効果』を期待していた。彼等は、それが彼等の急速な没落を阻止すると共に、（生産の）利益の正当な分け前を確保すると思っていたのである。（なぜなら）彼等の熟練と勤勉は、もう一方の人々（『雇傭者』）に与えすぎる程の利益を与えていたのだから。（括弧内は筆者）

つまりカーサル・ムーアの大会には、一八三七年にはじまる恐慌を背景に、労働組合、家内労働者の相当広範な層が運動に動員されていた、と想像されるのである。しかしながら労働組合とチャーチズムの関係が、たとえ現象的なものであつたにせよ、大きくクローズ・アップされたのは、

四二年恐慌を背景とした一八四二年八月のゼネストにおいてであろう。この八月、賃金の低落に対して何の打つ手も見失つたランカシャーの労働組合は、遂にゼネストに訴えて自からの意志を表明したのである。このゼネストについて今は立入らないが、さしあたり、丁度この時マンチェスターに到着したキャンプベルの次の言葉を引用するだけで十分であろう。

工場一つたりと動いていない、何かが起る、しかも何か途方もないことだ。^④

かくしてランカシャーは、この月、全くその機能を停止するに至つた。八月十五日・十六日、ランカシャー、ヨークシャーから、綿紡績工を含む百人以上の労働者代表がマンチェスター、カーペンターズ・ホールに参集した。討論の問題は、ゼネストを賃金問題の解決に止めるべきか、ある

いは人民憲章獲得の闘争に転化すべきか、ということであつた。そして代議員達は遂に後者を選び、七七対七の圧倒的多数をもって次の決議をなし、マンチェスターとその周辺の職業組合に呼びかけたのである。

我々代議員は……我々を選出した各種選挙団体に対し、人民憲章を実現するための一さいの合法手段を採用するよう勧告する。更に我々は、全国に代表者を派遣し、憲章が国法となるまで労働停止の決議を遂行すべく、中産階級と労働者階級の協力をうるよう努力することを提案する。^⑤

かくて史家M・ベアによれば、一八四二年八月は「労働組合が政治的チャーチズムに従属した月」^⑥となつたのである。

以上は労働組合とチャーチスト運動の関係を示す史料に現われた二つの例であるが、果して労働組合は真にチャーチスト運動のトレーガーであつただらうか。我々はこの二例につき今一度検討し直す必要がある。

先ず一八三八年の場合、史料は、カーサル・ムーアの集会后、労働者のチャーチズム支持が急速に低下したことを示している。^⑦そしてその原因の一つとして、労働組合勢力の運動からの後退を指摘することができるのである。一

八三八年から九年にかけてのM・P・Uにおける顕著な変化は、暴力派の擡頭であった。そして一九三九年五月までには、穩健な運動方法を主張する上級職人勢力は一掃され、革命をも辞さない暴力派の牛耳るところとなったのである。²⁵しかるに労働組合は、暴力に対しては全く否定的な立場に立っていた。時代はやや下るが一八四二年八月のゼネストに際し、マンチェスターの労働組合代表会議は、あくまでも暴力行使に反対することを表明しているし、また諸般の史料は、一八三八年から九年にかけて、労働者階級内での暴力派の基盤は案外に薄弱だったことを物語っている。これを要するに、恐慌を挺子に結集した一八三八年のランカシャーにおける労働者戦線は、暴力派の擡頭、運動執行部内でのそれに対する見解の衝突により分裂し、労働組合は、運動から後退せざるをえなかったのである。

では「労働組合が政治的チャーチズムに従属した」一八四二年八月の場合はどうであろうか。前掲の労働組合代表による決議は、確に労働組合とチャーチスト運動との密接な関係を示しているように思われる。しかしここに別の史料があるのである。我々は、一八四二年において、チャ

ーチスト運動の推進機関であった全国憲章協会 National Charter Association の決定を見る必要がある。八月十七日、同じくマンチェスターに会した同協会の代表者は、次の決議をなしたのである。

現在行なわれている労働停止は、チャーチスト団体が企図したものである。しかし我々は欣然として次の決議をなすものである。我々は我が選挙民とスト決行中の労働者諸子に対し、深く同情するものである。我々は、憲章が現実の法となるまで、この闘争を拡大し、持続させることを強く支持するものである。²⁶

この史料から明らかな如く、このゼネストはチャーチスト団体とは無関係に発生したものに他ならず、更にいえば労働組合は、チャーチスト運動の推進機関たる全国憲章協会の傘下にははいっていなかったのである。協会執行部は、かかる事態を前に何の手も下せなかった。最大の實力者オコンナーは、ゼネストを反穀物法同盟の策略と見てこれを信用しなかったし、T・クーパー、P・マックドゥアルは、労働組合と相容れない武力行使を主張して止まなかった。かくして彼等は、手を拱いてゼネストの崩壊を見守る他はなかったのである。²⁷

以上、労働組合がチャーチズムに最も接近したと思われる二例の分析から、我々は、綿紡績工を中核とした労働組合勢力はチャーチスト運動の實質的担い手ではなかつた、と結論できるであろう。そして我々は、「では労働組合を動かした利害とは一体何か？」という新しい問題に逢着するのである。しかしこの問題は、本稿の主題とは別問題で立入るわけにはいかない。ただここでは、労働組合はトレード・ユニオニズムの立場を固定しつつあつた、というに止めておこう。この期の労働組合は、すでに労資の協調、合法闘争をその基調としており、政治闘争は彼等に固有のものではない、とする態度を有していたのである。彼等が一時的にもせよチャーチスト運動の戦列に加わつたのは、恐慌の振子が余りにも振れすぎたため、といつていいであろう。かくして我々は、チャーチスト運動の實質的担い手を手織工に求めざるをえなくなるのである。

3 手織工

イギリス木綿工業は、一八二五年恐慌から一八三七年恐慌の間に一大飛躍を上げた。綿製品の輸出は、一八二五年の二九五〇万ポンドから、一八三六年には五八四〇万ポ

ンドと約倍増した^④。そしてかかる生産の増強、輸出の拡大は、イギリス国内における新技術の導入、工場設備の拡張、生産コストの引下げによる家内工業職種の没落を通して達成されたのである。この約十年の循環期間内での木綿工業における最も顕著な事柄は、織布工程における力織機の普及ということであつた。すなわち、一八世紀末から十九世紀初期にかけて紡績工程で起つた変革が、今織布工程で行なわれるに至つたのである。力織機は一八二五年頃から大規模に導入され、三〇年代には急速に普及するに至つた。一八二七年、四万五千台であつた力織機は、一八三三年に十万台、一八三八年には十三万台へと増加した^⑤。しかしかかる力織機の普及は、他方ではなお家内工業生産体制に從属していた手織工の没落を決定的たらしめたのである。マルクスの次の言葉は、決して誇張した表現ではなかつた。

イギリスの木綿手織工たちの漸次的な、数十年にわたり、そしてついに一八三八年に完了した破滅以上に恐ろしい光景は、世界史上に見られない。彼等のうちの多くは餓死し、多くは一日二ペンス半でその家族とともに長いあいだやつと露命をつないでいた^⑥。

一八四〇年頃、手織工は、ランカシャーだけで十万人程

在していたが、これはマルクスの言葉にもかかわらず、當時にすれば一つの社会的な勢力を形成するに十分な数であった。^⑩しかし手織業の没落は、三〇年代から四〇年にかけての力織機の普及の中にもはや決定的であり、イギリス労働者は次々にこの職種から身を引きつつあった。ちなみに綿織物生産は、一八二九〜三一年から一八四四〜四六年にかけて二倍半に増えたが、一方織物工の数は、この期間に約三分の一減少しているのである。^⑪しかしながら、チャーチスト運動が高揚した一八三七年から一八四二年の時期においては、この時期に特殊な諸条件が、この職種の死を今しばらく遅らせることとなったのである。というのは一つには、資本家となり、この安価で出来高払いの労働力を用いるのが便利だったからである。すなわち資本主義制度が発展して恐慌が周期的現象として現われるようになった時、ましてや一八三六年から四二年にかけての恐慌期においては、旧制度(家内工業)の資本家は、労働者に請負わせていた仕事をいとも簡単に中止して、工場という大固定資本の蒙る損害を最小に回避することができたからである。^⑫第二は、この職種の労働力が、アイルランド移民とい

う膨大な労働人口により絶えず補われていた、ということである。移民の洪水は一八三六年のアイルランド大飢饉で始まり、四〇年代の馬鈴薯の飢饉で拍車された。その数は、一八四二年にマンチェスターでは人口の約一割、ランカシャーへの移民は十三万三千に達したといわれる。そして一八四一年から五年にかけて、約五十万人がイングランドへ移住し、五年のランカシャーのアイルランド人口は、約二十万と推定されている。^⑬彼等は地理的にアイルランドに近く、また工業地帯であつたランカシャー周辺に特に聚集して来たが、ここではすでに排他的な労働組合ができ上っていたから、いきおい手織業の如き死滅しつつある家内工業職種に殺到せざるをえなかった。このようなわけで、元来アイルランド系の多かつた手織工の大群は、移民の洪水によって更にその大部分をアイルランド人に負うこととなったのである。

すでに述べたことから十分察せられるように、手織工の生活は全く惨めなものであった。彼等は労働者階級のうちでは最低の賃金をもらっており、また人手に溢れる職種のこととて、不況でない平時でも週五〜六シリングももらえ

ばそれで幸いの部類であった。しかもこれだけの額をうるのにさえ、十四〜十八時間の長時間労働に耐えねばならなかった。伝染病の温床である地下室に大勢で住んで、しかも馬鈴薯を常食としていた。そして「恐慌がやってくるたびにまっさきに押えられ、そして一番最後に放免される」^⑧のが、この手織工だったのである。一八四〇年のリヴァプールにおける日傭い・職工の平均寿命は十五歳と計算されているが、^⑨そうだとすれば、手織工のそれは十五歳以下であったことは確実である。かかる劣悪な生活状況は、それ自体反抗の力であった。チャーチスト運動に彼等が加わった第一の理由は、彼等が、力織機との競争の前に没落を予定された運命を逃れることができず、窮乏と貧困の一切をその肩に背負わされたということであった。そしてそこへ恐慌とアイルランド移民の洪水が同時に押し寄せて来た。失業した手織工の大群がランカシャーの町々に溢れ、ここにチャーチスト運動の強大なエネルギーが誕生したのである。しかしながらこれが手織工の全てではない。チャーチスト運動と手織工の関係はもう少し混み入っている。この間の経緯を理解するためには、我々の考察はどうしても新

救貧法（一八三四年成立）にまで及ばねばならない。

新救貧法を組上りにのせるといっても、新救貧法の法体系と地方行政とか、同法成立の背景とかが問題なのではない。これらはまた別の支脈に属する問題である。ここでは新救貧法の手織工に関する部分をとり上げればそれで足りる。

その骨子は、新救貧法が従来のスピンナムランド制度を廃して、これを救貧院の院内救助一本としたこと、これに対してランカシャーを含む北部工業地帯に一大反抗運動が起った、ということである。スピンナムランド制度とは、一七九五年、ナポレオン戦争を期とする経済不況に際し、バークシャーの行政関係者が同州のスピンナムランドに会して決定し、議会の追認をえて全国に拡大されるに至った救貧制度である。この制度は、一口でいえば「パン価格の変動に比例して労働者の賃金を救貧税から補填する賃金補償制度」であった。^⑩新救貧法はこの制度を全廃して、救貧者は全て救貧院に收容して救助するという、いわゆる院内救助をもってこれに替えたのである。スピンナムランド制度は、イングランド南部の農業地帯には全面的に適用され、「ポーバリズムの巢窟」を生み出すことになったが、北部

工業地帯ではこれとは別の結果を生んだのである。コールはこれを次のように要約している。

これらの地域では、救貧のスピーナムランド制度は実施されたことは一度もなかった、といつてよかつた。すなわち救貧税から恒常的に賃金を補うという制度は全くなかったのである。ここでは、旧救貧法は、被雇傭者の賃金を補助するのに役立っていたのではなくて、全ての失業者、および出来高払いの仕事からの収入では生活がなりたたない労働者のための失業救済の形で役立っていた。この後者の事情は、特に手織工の如きグループにあてはまるものであった。……なぜなら彼等は、景気のいい時には、生きるためにかすかすの収入があつたが、雇傭者が家内労働者に仕事をまわすより先に、工場の機械が完全に動くことをはかる不景気の時には、彼等の雇傭は不規則であるか、ないしは全くないという状態へと落ちていっていたからである。^⑧

すなわち北部においてスピーナムランド制度は、手織工が生活の一切のつてを失つた時、頼るべき最後の綱として役立っていたのである。新救貧法が適用されれば、彼等は最後の抱り所を奪われ、彼等が憎しみをこめて名づけた「救貧法のパスチーニ」たる救貧院に行く他はなかつた。救貧院については紙幅の関係で言及しえないが、いずれに

せよ「劣等処遇の原則」(扶助の内容は、扶助を受けなくても自己生活する最下級労働者の生活条件よりも劣つたものでなければならぬ、とするもの)が貫徹していたから、それは文字通り「救貧法の牢獄」に他ならなかつた。そのようなわけで、一八三六年、不況と期を一にして同法が北部工業地帯に導入されるや否や、ランカシャーでは、J・R・ステイープンズ、続いてオコンナーを指導者に激烈な新救貧法反対運動が展開されることとなつたのである。

折からチャーチズムの十字軍を企図していたL・W・M・A、バーミンガム政治同盟 Birmingham Political Unionが、この北部に生れた大きな力を見逃すはずはなかつた。

ミッシェンが派遣され、支部が相次いで設置された。前述のM・P・Uもこの支部の一つとして生れたものであつた。かくしてロンドン、バーミンガムに発したチャーチズムは、ランカシャーを含む北部工業地帯を完全に包摂したかに見えたのである。しかしそれは、あくまでも外見だけの話であつた。上級職人層のチャーチズムは、この勢力を把握することができなかつたのである。合法闘争、労働者教育の徹底による政治意識の高揚を謳つたL・W・M・Aの漸進

的闘争方針は、明日のパンを最大関心事とする手織工には何等訴るところがなかった。かくして社会運動としての実質を備えたチャーチスト運動は、新救貧法反対運動の過程で手織工を把握したオコンナーの指導下に展開されることになったのである。

以上三節にわたる労働大衆の分析から、我々は、ランカシャーにおけるチャーチスト運動のエネルギー主体が、手織工にあつたことを明らかにした。手織工が運動に参加したのは、恐慌による賃金の低落、新救貧法によるスピーナムランド制度の廃止に起因していたが、より基本的には、彼等が新しい工場制度の発展の前に消滅すべき運命を担っていた、ということにあつたのである。しかし、チャーチスト運動の実質的担い手を確認しただけでは、なおチャーチスト運動の具体的な歴史像が描けたことにはならないであらう。所期の目的を達成するためには、我々はどうしても手織工の意識の実態を究明しなければならぬ。

4 手織工の意識の実態

一体手織工がチャーチスト運動に期待していたものは、具体的にはそもそも何であつたらうか。その答は、これま

で述べ来たところからおのずと明白であらう。彼等が直接要求したものは、人民憲章ではなく、パンそのものであつた。なぜなら、恐慌でギリギリの生活に追いやられ、その上新救貧法の脅威にさらされて彼等は蹴起したからである。ステイブンスのあの有名な言葉は、すばりと手織工におけるチャーチズムの本質を言い当てていたのである。

いかに反駁されようと、普通選挙の問題はナイフとフォークの問題、つまるところ、パンとチーズの問題である。……

次に彼等の政治意識ほどの程度のものであつたらうか。ほとんどが文盲であつた彼等に、高い政治意識を期待することは所詮無理であつた。彼等は読書^{リテラシー}大衆としてよりは、むしろ聴^{ヒヤリング・インテリゲン}衆として存在したから、指導者の弁舌、カリマスによつて容易に左右せられたのである。彼等がチャーチズムを支持したのは、人民憲章がパンをもたらずと教えられたからであつた。下層労働者の指導者の一人、J・ハーニーは、次のように述べている。

我々は、それが我々の権利であるがゆえに普通選挙を要求する。そしてそれは我々の権利であるだけでなく、……家庭に幸福をもたらし、またパンと肉とビールをもたらずと信するがゆえに、そ

れを要求する。^⑩

彼等の政治意識は、結局その程度のものであった。パーニー自身後に往時を回顧して、彼等の政治意識の低さをしみじみ述懐せざるをえなかったのである。^⑪

チャーチスト運動における手織工の意識状況は、およそこのようなものであったが、では彼等の意識は、歴史的にはどのように規定されるべきものであったのであろうか。従来手織工の意識がとりたてて問題とされたことはないが、大きくいつて二つの評価が存在していた、ということができよう。一つは、エンゲルス^⑫、レーニンの評価であつて、未熟ではあるがいわゆる近代プロレタリア意識をそこに認めようとするものと、むしろ十九世紀以前の農民的意識と解するホベル^⑬、コールの見解である。文盲で文書を残さなかつた手織工の意識の実態を明確化することは、もとより困難である。しかし諸般の歴史的事実を虚心坦懐に見つめるなら、手織工が形態的には生産手段から解放されたプロレタリアートであつたことを認めるとしても、むしろ農民的な意識を抱いていた、というべきであらう。その第一の例は、消極的なものであるとはいへ、彼等の新救貧法反対運

動の中に見出されるのである。

すでに述べたように、一八三六年に新救貧法がランカンヤーに導入されるや、手織工の激烈な反対運動が起つたのであるが、しかしこのエネルギーは、実は一八三八年秋には早くも霧散しつつかつたのである。その理由は、一つには

恐慌下に喘ぐ手織工を慮つた救貧委員達の配慮から、一つには新救貧法反対運動の激しさのゆえに、従来院外救助が続行されたためであつた。^⑭一八三八年十一月、オコンナーは新救貧法反対のエネルギーが消散しつつかつたこと、新しい具体的な運動目標が今や必要であることを認めざるをえなかつた。^⑮かくして彼は、L・W・M・Aの人民憲章を、戦術的見地から渡りに舟と歓迎したのである。しかしこの事實は、裏を返せば手織工の意識の低さを物語るものにならなかつた。新救貧法は、その実施が一時見合されただけで廃止されたわけではなかつたからである。かくてオコンナーの以後の主張は、人民憲章と新救貧法反対の二本立となつたが、一方手織工は、新救貧法反対運動を対ブルジョアジーの階級闘争には高めず、人民憲章の「あめ」にたぶらかされてしまつたのである。この事實の背後に我々は、

ホベルやハモンド夫妻がいうように、なお十八世紀的な素朴な農民的意識の存在を推察することができるであらう。^⑤

第二の事実として我々は、手織工がその多くをアイルランド人に負うていたことを想起すべきである。彼等はイングラントに上陸するや否や、形の上ではプロレタリア化したには違いないが、その意識までが同時にプロレタリア化することは不可能であつただらう。かつての農民意識は、そう簡単に変質するものではないからである。^⑥

更に第三に、チャーチスト運動の過程に農民的意識の現われを指摘せよというのなら、我々は、手織工が支持して止まなかつた、かつ自からも *fustian jackets* の指導者として任じたオコンナーの土地計画を挙げることができるだらう。というのはこの土地計画は、当時における農民的な意識の一つの型を示しているように思われるからである。

オコンナーは生来行動の人であり、経済学者でも哲学者でもなかつた。彼の発言は随所で矛盾撞着しており、その思想を適確に把えることは困難である。しかし彼がチャーチスト運動の後期に実現させた土地計画は、彼の本心を示したものと見ていいだらう。彼は彼の理想の実現のため、

人民憲章の要求さえ引込めたのである。彼の土地計画とは要約していえば次のようなものであつた。すなわち、先ず国民土地会社を創設し、これが土地を購入する。そしてこの土地に労働者を入植させ、個人的小土地保有と労働の協同に基く農業を行なわせる、というものである。この会社は一八四六年十月にオコンナーを理事として発足する。そして一八四八年五月には購入土地面積は一〇一八エーカーに達し、入植者も増加するが、同年八月には会社経営の不振、土地の騰貴、入植農民の貧困化のため倒潰してしまふのである。^⑦

従来オコンナーの土地計画は、産業革命以前における独立自営農民社会を志向したアナクロニズムとして非難されてきた。しかしこの非難は必ずしも妥当しない。なぜなら一八四〇年代後半は、一八七〇年に終るイギリス農業の大発展が、すでに一般の土地投機熱を高めており、またこの時代には、彼の土地計画以外にも幾つかの自由土地保有協会の設立が見られ、*Back-to-the-land Movement* が一つの社会的趨勢であつたからである。^⑧ 事実、国民土地会社への各地の醸金状況を見れば、オコンナーの計画は、手織工は

かりか、工場労働者から上級熟練職人にいたる広範な支持を獲得していたことがわかるのである。しかしながらこの際、手織工で土地計画への参加者が少なかったということ

は、我々にとって問題ではない。後述する如く、チャーチスト運動衰退期の四〇年代後半にあっては、むしろこれは当然のことだったのである。筆者が問題としたのは、手織工の指導者として土地計画を意図したオコンナーの意内である。彼の最大関心事は、機械工場制度の周期的恐慌が生み出す貧困労働者、失業者をいかに救済するか、ということであつた。彼の発想は、十八世紀の農業社会への復帰ということよりは、むしろ、政治・社会制度が経済の変化にアダプトできない現実的な時代の矛盾に根ざしていた。そして問題は、彼が時代の子として、その解決を土地に求める他はなかった、ということなのである。かかる意味でオコンナーの土地計画は、チャーチスト運動の指導者と手織工の意識の実態を示している、ということができるのである。

以上のように我々は、当時の労働者の中にお色濃い農民の意識を見るのである。すなわちコールのいうように、

「労働者たちは、本質的に大工業制度に反対の、主として農業に基礎を置く制度の維持、復活に基いた思想の中に感激を見出していた」のである。

最後に、チャーチスト運動の衰退について一言しよう。

チャーチスト運動は、一八四三年以後決定的な衰退過程に突入するが、この理由は、史家スロソンの指摘を待つまでもなく明白である。それは四三年から始る経済の盛況にあった。「主要部門の生産高は、前の循環で達せられた最高水準にくらべて、平均およそ五〇%、三〇年代末から四〇年代初期にくらべて二五〜三〇%がた増加した。イギリスから外国に輸出した商品の数量は、一循環の間に一倍半以上になった」のである。またこの時代はイギリス上空前の鉄道ブームで、例えば「一八四七〜八年には、鉄道建設用資材を調達する人と鉄道建設工事に直接従事する家族を含めて、恐らく百万人を下らない多数の人々が鉄道建設からえられる賃金で生活していた」と推定されている。かくてこの好況が下層労働者の生活を向上させ、その失業者を吸収する一方、前近代的な家内工業労働者層を分解・解体せしめていったのである。問題の手織工は、一八四〇年の

約十萬から四八八年には五萬人、チャーチズムが全く有名無実となつた五四年には三萬人となり、選挙法改正運動（一八三二年）の際の七分の一以下に激減してしまつたのである。^⑤かくてランカンシャー・チャーチズムに固有な、歴史的トレイガーたる手織工は、この好況のうちに、いうなれば健全な死を遂げたのである。彼等の崩壊過程はそのままチャーチスト運動の崩壊過程に他ならなかつた、ということができる。

革命の年たる一八四八年四月、ロンドン、ケニントン・コモンにチャーチスト第三次請願の大集会が開かれた。しかしこの時ランカンシャーでは、平和は多少破られはしたものの、それはチャーチスト運動によるものではなかつた。一八四八年のランカンシャーには、革命の危機は全くなかつたのである。^⑥

三 結 論

ランカンシャーにおけるチャーチスト運動を考察するにあたり、産業革命という社会的背景は絶対に無視することができない。産業革命はまぎれもなく新しい生産体制、すな

わち工場制度の誕生、発展の過程であつた。しかしそれが同時に、古いもの、すなわち家内工業的生産体制の衰退、死滅の過程であつたことは忘れられてはならない。これを換言すれば、それは近代工場制度が前近代的家内工業を超越していく過程だったのである。そしてチャーチスト運動は、まさにこの二つの体制の葛藤の最終的総決算であつた。根本において農民的意識に支えられた、旧体制最後の旗手たる手織工は、この運動を最後に歴史の舞台から消えていったのである。

以上を要するに、我々は、チャーチスト運動の基本的性格を「前近代的家内生産体制の近代工場制度による最後の克服の過程」と規定していいであらう。そして同時にそれは、工場制度以前の農民的な残滓をも一掃したのである。

① F. F. Rosenblatt: *The Chartist Movement, In its social and economic aspects* 1916. pp. 7-9.

② G. D. H. Cole: *A Short History of the British Working-Class Movement 1789-1947*. 林河上、嘉治訳『イギリス労働運動史』I（岩波現代叢書）一六五頁。

③ 同右 邦訳二二頁。

④ レーニン『労働者にたいするブルジョア・インテリゲンツィ

- アの闘争方法』全集、第二〇巻、邦訳、四九一頁。
- ⑥ A. Briggs: ed. *Chartist Studies 1959* Ch. I, *The Local Background of Chartism*, by A. Briggs. pp. 1-3.
- ⑦ *Ibid.*, ch. I, p. 2.
- ⑧ A. Briggs: ed. *Chartist Studies* はこの種の研究のそのものである。佐藤明「イギリスにおける地方史研究」『西洋史学』49
- ⑨ *Ibid.*, ch. I, p. 4.
- ⑩ M. Howell: *The Chartist Movement 1918*, reprinted in 1950, p. 98.
- ⑪ エリブ・フ・メンザリン『恐慌の理論と歴史』第2分冊、二〇七頁。
- ⑫ 同右二一八頁。
- ⑬ E. J. Hobsbawm: *The British Standard of Living 1790-1850* (Eco. H. R. 2nd Series, Vol. x, No. 1, 1957) p. 54.
- ⑭ A. Briggs: op. cit., ch. II, *Chartism in Manchester*, by D. Read. p. 30.
- ⑮ *Ibid.*, ch. II, pp. 43-6.
- ⑯ 古賀秀男「チャーティスト運動とトローブ・ニコソン」『西洋史学論集』第六輯)
- ⑰ E. J. Hobsbawm: *The Labour Aristocracy in 19th Century Britain* (J. Saville; ed. *Democracy and Labour Movement 1954*, p. 202)
- ⑱ ノーベ、林他訳、前掲書付録Ⅲ
- ⑲⑳㉑ E. J. Hobsbawm: *The Labour Aristocracy*. p. 204.

- ㉒ カーライルはアイルランド人を次のように描いている。
「不正直な狡猾、邪悪、背理、悲惨、嘲笑を顔つきにあらわしたこのあらゆる美しいマイリージュスふうの顔が、わが国のあらゆる大通りや裏通りで諸君の目にはいる。そばを馬車をはしらせて通りすぎるイギリス人の馭者がこうしたアイルランド人を鞭でなぐる。そのアイルランド人は舌でののしりながら、帽子をさしたして物乞いをする。アイルランド人こそ、この国がたたかわなければならぬ、もともしまつのわるい災厄である。ほろを着て、ずさんだ笑をうかべたアイルランド人は、たくましい腕と頑丈な背さえあればよいあらゆる仕事をいそいそとひきうける。——しかも馬鈴薯を買えるだけの賃金ではたらくのだ。……このような条件ではたらくことのできないサタンの男は失業してしまふ。文明化されてならぬアイルランド人は、その力によつてではなく、その力の反対物によつて、サタンの土着人を駆逐し、その地位をしめてしまふ。……」(H. マンケルズ『イギリスにおける労働者階級の状態』マルティン選集、補巻2、一四一〜二頁)
- ㉓ 古賀秀男「チャーティスト運動の歴史的性格と意義について」『西洋史学』42)
- ㉔ 代表を築いた組合は次のものである。United Trades, Tailors, Smith and Wheelwrights, Dyers, Joiners, Fustian shears, Callenders, Painters, Men's Boot and Shoemakers, Marble and Sawyers, Spinners, Farriers. (*Manchester Guardian*, 26 sept. 1838) A. Briggs: op. cit., ch.

II, p. 44.

② Ibid., ch. II, p. 44.

キヤンペナルは、後に述べる全国憲章協会の書記長であった。彼は同協会の会合のため、ロンドンから到着したのである。

(M. Howell: op. cit., p. 261)

③ M. Beer: A History of British Socialism. Vol. II, p. 145.

④ Ibid., p. 139.

⑤ A. Briggs: op. cit., ch. II, p. 45.

⑥ Ibid., ch. II, pp. 46-7.

⑦ M. Beer: op. cit., p. 143.

⑧ 例えは治安維持のため、北部方面の司令官に任せられて来た C. F. Napier の手記等。(A. Briggs: op. cit., ch. II, pp. 46-7.)

⑨ Ibid., ch. II, p. 54.

⑩ M. Beer: op. cit., pp. 148-9.

⑪ メンデルソン、前掲書、一七七頁。

⑫ 同右、一七八頁。

⑬ マルクス『資本論』第一部、(青木書店版)六九七頁。

⑭ 当時十万という数は十分な社会的勢力を構成しうる数であった。例えば労働組合は、一八三四年すでに「全国労働組合大連合」の全国的大運動を展開した程の存在であったが、組合員の数は、チャーティスト時代においてさえ、なお英国全体で十方に達しなかつたといわれている。(飯田鼎『イギリス労働運動の生成』三八九頁)

⑮ メンデルソン、前掲書、一七九頁。

⑯ W. コート、荒井・天川訳『イギリス近代経済史』七四頁。

⑰ J. L. Hammond and Barbara Hammond: The Bleak Age, p. 37.

⑱ エンゲルス、前掲書、二一四〜五頁。

⑲ F. F. Rosenblatt: op. cit., p. 65.

⑳ スピートナムランドのパン率とは次のようなものである。「目方八ポンド二オンスの二級品小麦粉のパン塊の価格が一シリングである場合には、すべての勤勉にして貧困な成年男子一人に対して週三シリングを保障される。その金額は彼自身もしくはその家族の労働によつて得られなければ、救貧税から支給される。彼の妻およびその他の家族一人につき週一シリング六ペンスが支給される。前記のパンが一個一シリング四ペンスの価格である場合には、成年男子は自己の生存のために週四シリングを、家族一人あたりの扶助のために週一シリング一〇ペンスが支給される。同じように前記のパンが、一シリング以上の価格で、一ペニー騰落すること、例えば成年男子には週三ペンス、家族一人当り週一ペニーを、比例的に増減するものである」(G. Nicholls: A History of the English Poor Law. Vol. II 1904, p. 131. 田代不二男『英国の救貧制度』七二頁)

㉑ G. D. H. Cole and R. Postgate: The Common People 1746-1938, p. 271.

㉒ ケー博士は次のようにいつている。「我々の意図していることは、救貧院をできるだけ牢獄のようなものにすること、また

それをのみきただけ居心地の悪いらぬのじやあ、といふことであらう。」(Rosenblatt: op. cit., p. 47.)

⑮ M. Howell: op. cit., pp. 61-2.

⑯ M. Beer: op. cit., p. 47.

⑰ 一八三二年〜四八年についてウェップは、次のような数値をあげている。「正確な資料によつても不正確な資料によつても、労働者階級のリテラリーの率は、三分の二から四分の三となる。

そして文盲率の最も高い農業地帯のそれが五〇%であることを考へれば、その率はむしろ四分の三に接近する。」このことは逆にいへば、労働者階級の文盲率は四分の一から三分の一といふことで、彼等の間にも相当な読書^{リテラシー、リテラシー}大衆がいたことを示している。しかし手織工が最下層の労働者層であつたことを思へば、彼等は当然、この四分の一から三分の一の労働者に属してゐた、と考へるべきであらう。(R. K. Webb: The British Working Class Reader 1790-1848, p. 22.)

⑱ A. L. Morton and G. Tate: The British Labour Movement 1957, p. 78.

⑲ 一八四九年、彼は「チャーチスト運動のランク・アンド・フアイルについてこう述べている。「全くひどい話だが、長年にわたる『改革』と『チャーチスト』の運動を経験したくせに、チャーチズムが勝利していればその恩典に均霑している筈の大衆部分は、今だに人民憲章のことを知らないのか、あるいはそれに全く無関心である。このことは一人農業労働者のみならず、地方人口の相当な部分にも言えることである。」(A. Briggs:

op. cit., ch. ix, National Bearings, by A. Briggs, p. 294.)

⑳ 「労働者は、ブルジョアが労働者をまるで物であるかのように、自分の財産であるかのようにとりあつかうことに、一瞬間ごとに気がつく。そしてその理由からだけでも労働者は、ブルジョアジーの敵としてたちあらわれれる。……現在の事情のもので、労働者が自分の人間性をすくうことができるのは、ただブルジョアジーにたいする憎悪と反抗をつうじてだけである。……イギリスの国民性は労働者のうちでは全く破壊されてゐる。」(エンゲルス、前掲書三一〇〜三二〇頁)

㉑ 「それは(『新教貧法反対運動』筆者)民衆の側から見る時、未発達で十分な展開をとげることのない叛乱であつた。その起源は、恩寵の巡礼、ジャック・ケイドの乱……にまで溯るだらう。……それは不幸な大衆デモで、不満の解決という他には何のプログラムも持たなかつた。」しかしホベルにおいて注意すべきことは、彼が新教貧法反対運動を、メソジズムの大覚醒を背景とする宗教感情の爆発と理解している点である。彼は続けて次のようにいつている。「その民衆運動は素朴なものであり、チューダー以来絶えていた宗教感情の復活であつた。」(M. Howell: op. cit., pp. 85-6.)彼の主張の根拠は、「基本的にはメソジストである運動の二人の指導者、すなわちランカシャーにおけるステイブンズとウエスト・ライディング(ヨークシャー)におけるオスラーに見られる強烈な宗教性にあるのだが、しかし我々は、この評価を認めるわけにはゆかない。なぜなら、ステイブンズが逮捕された(三八年十二月)後のランカシ

キヤーで、宗教とは無縁のオコンナーが大衆の英雄となつた、という事実は、ホベルの見解では説明されえないからである。否それに止らず我々は、これに対する反証を挙げることができるのである。確に、産業革命を背景としたメソジズムの興隆は刮目すべき大歴史現象ではあるが、ランカシャーの労働者とメソジズムの間には、特に密接な関係は見出しえないし、(Wear-mouth: Methodism and the Working-Class Movement 1800-1850, pp. 236-8.) またキンケルズも「同様に、当時の史料は、労働者のキリスト教からの離反を示している点で皆一致しているのである。例えば高教会派牧師のモズリーは「全工業人口、都市の貧困階級は教会から遠ざかっているといえる。否、彼等の不幸はそれに止らない。四分の三ないし十分の九の巨大な部分は、信徒でもなく、またいかなる宗教とも無縁である。」と述べているし、また或る一職工の言によれば、彼等のキリスト教からの離反状況は「職工が宗教的会合で減多に見うけられないのは、我々の多くの職場で牧師が減多に見うけられないのと同じだ」といった塩梅だったのである。(以上の二つの引用は、H. U. Faulkner: Chartistism and the Churches 1916, pp. 13-4, 74-5) これらの史料は、むしろ運動のランタ・アンド・フアイルにおける宗教意識の後退を示すものといつてよく、それゆゑ宗教意識に関するホルムの評価は一面的といわざるをえない。我々は新救貧法反対運動を、またその発展したランカシャー・チャーチズムを、宗教運動と解するわけにはゆかないのである。

② 人口一人当りの救貧費は、恐慌の襲来と共に、年々増加している。一八三八年の五シリントン五・二五ペンスは一八四二年には六シリントン一・七五ペンスとなつている。(Nicholls: op. cit., p. 438.) また一八四一年に救貧法委員会は、院外救助を禁じた連合区(教区に代る新しい救貧行政の単位)のリストを発表したが、ランカシャーについては一連合区も、そこに名を載せつゝなす。(The Hammonds: op. cit., pp. 101-2.)

③ N. Howell: op. cit., pp. 116-7.

④ ハモンドは、北部大衆の間にはまだ田園生活の記憶が生々しかったとして、危害癩の問題を挙げている。一八三〇年、すでにロンドンでは大衆の危害癩が問題化していたが、北部ではまだその痕跡はなかつたのである。「スタンフォード卿が日曜日自分の庭を開放したところ、マンチェスターの労働者がどつと押しかけた。……しかしこの二万人の訪問者は彼の庭園に何の被害も与へはしなかつたのである。」(The Hammonds: op. cit., pp. 34—5.)

⑤ アルプヴァクス、清水訳『社会階級の心理学』第二章。

⑥ P. W. Stosson: The Decline of the Chartist Movement 1916, pp. 84-93.

⑦ A. Briggs: op. cit., ch. x. The Chartist Land Plan, by J. MacAskill, p. 337.

⑧ Ibid., ch. x, pp. 330—1.

⑨ Ibid., ch. x, pp. 306-7, p. 340.

⑩ コール、林他訳、前掲書二一六頁。

- ⑥1 P. W. Slosson: op. cit., ch. III.
 ⑥2 メンデルソン、前掲書 二七四頁。
 ⑥3 コート、荒井・天川訳、前掲書 一九五頁。
 ⑥4 この好況は、手織工の賃金さえも上昇させた。「彼等は一八二五年この方、最高の賃金を獲得している」(Manchester Guardian Aug. 17, quoted in A. Briggs: op. cit., ch. II, p. 56).
 更に、この好況がランカシャー労働運動の基本的動因たる労資間の対立感情をも緩和してしまったことは、注意されねばならぬ。一八四二年まで cotton operatives は、保護貿易論者の主張に影響されて、穀物法廃止をはかる cotton masters を信用しなかつた。保護貿易論者の主張は、賃金はマンの価格に比例する、というものであつた。それゆえ、ブルジョアジーの穀物法廃止の意図は賃金の切下げにつながる、と考えられたのである。しかし、この主張は、この好況期の間に、二度までも否定されることとなつた。すなわち一八四三〜五年の間に、マン価格は下つて賃金は上り、続く一八四五〜六年の間にマン価格は上つて賃金は下つたからである。この保護貿易論の敗北は、ブルジョア・労働者間の対立を急速に緩和してしまつた。

- マンチェスター・ガーディアンは次のように述べている。「この四ヶ月間における小麦価格の上昇は、かつていわれた如き賃金の上昇ではなく賃金の下落を結果したから、この地方の物のわかる労働者は、再びかつての信念を取戻すに至つた。すなわち彼等は、穀物法廃止をはかる雇傭者の目的は賃金の切下げではないこと、雇傭者も労働者も、十分な食料の供給を確保するところが共通の利害に立つことを知つたのである。」(Manchester Guardian 17 Dec. 1845.)そして、「個人的にチャーチズム支持者の多かつた労働組合員のブルジョア経済学への改宗は、大きくチャーチズムの衰退を促進したのである。ストックポートの一労働者の次の言は、この経緯をよく物語つてゐる。
 「私はかつてチャーチストであつたが、今では、より健全な諸見解を受容れる必要があることがよくわかつてゐる。……民衆の苦しみの多くは、穀物法に原因がある。」(第二章第一節参照。A Briggs: op. cit., ch. II, pp. 58-60.)
 ⑥5 P. W. Slosson: op. cit., pp. 130-1.
 ⑥6 A. Briggs: op. cit., ch. II, pp. 62-3.
 【付記】 D. Read and F. Glasgow: Feagus O'Connor, Irishman and Chartist 1961 は未見に終わつた。

The Historical Image of the Chartist Movement

—especially in Lancashire—

by

Kenji Muraoka

To the question 'what is the Chartist Movement?', people answered 'the labour-class movement requiring the realization of the People's Charter' according to an ordinary definition of school textbooks. This movement was not merely the political movement of labour class but essentially the social-economic movement, which is clear by remembering the early nineteenth century in England as a violent period of the industrial revolution. Beyond this ordinary textbook interpretation a certain viewpoint which may be generally accepted is Lenin's; that is, 'the first broad and politically organized proletarian-revolutionary movement of the masses'. But when we step into the actual process of the Chartist Movement, this Lenin's categorical definition does not prove a correct image of Chartism. According to this observation, we have to conclude that 'the historical image of the Chartist Movement' is still unsettled.

This article, from this point of view, tries to describe a concrete historical image of the movement, focussing attention mainly upon Lancashire, the central district in the Industrial Revolution.

On the passage of Ibn-Khurdadhbih Concerning the Term "Rus'"

by

Ryôhei Kasaki

An Arabic writer of the middle of the 9th century, Ibn-Khurdadhbih relates in his work "The Routes and Kingdom" (Kitab-al-Masalik Wal-Mamalik) as follows: "The Rus' merchants are a sort of Saqaliba." The anti-Normanists in the so-called "Problem of Rus'" assume the term "Saqaliba" in this passage as the Slaves exclusively, and assert that Khurdadhbih speaks distinctly that the Rus'